

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520900

研究課題名(和文) 第三共和政前期のパリにおける同郷集団と選挙についての実証的研究

研究課題名(英文) A historical study on groups of migrants and elections in the first period of the French Third Republic

研究代表者

長井 伸仁 (NAGAI, Nobuhito)

上智大学・文学部・准教授

研究者番号：10322190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてパリでおこなわれた国政および地方選挙において、地方出身者の集団がいかなる役割を果たしたのかを調査したものである。その結果、地方出身でありながら選挙を通じて市政や国政に進む者は多かったが、彼らが選挙において同郷会の積極的な支持を得ることは少なかったことが判明した。これは、地方出身者がパリ社会に統合されていたという近年の見解を確認するものであり、同時に、地方出身議員の経歴や支持層について、新たな疑問を導き出すものでもある。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine the role, in national and local elections in the second half of the 19th Century, played by the groups of people from provinces. In the historical documents we read, we found few cases of such activities, whereas, in fact, many people from provinces became candidates in elections and went to the Parliament. This fact confirms a recent historical view, according to which people from provinces were well integrated in the capital. On the other hand, some questions arise, concerning the career and supporters of those who became assembly members in Paris.

研究分野：フランス近現代史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：フランス 移住 都市 同郷会 選挙 近代史 現代史 西洋史

1. 研究開始当初の背景

近代フランス都市史研究の主要テーマの一つに、首都パリへの移住者がパリ社会に統合されたのか否かというものがある。パリの人口は 19 世紀の百年で 5 倍を超える増加をみたが、増加分の大半は地方もしくは周辺国からの移住者であった。この時期のフランスは言語的・文化的に強い多様性を抱えていたため、外国人だけでなく国内諸地方からの移住者も、パリ社会では多少とも異質な存在だったと考えられる。彼らの統合の研究が重要になるゆえんである。

この問題について、研究者の理解は大きく変わってきた。1960 年代までは、移住者はパリに統合ないし同化されたとみなされていた。ルイ・シュヴァリエ著『パリ人口の形成』(1950 年)はそのような研究の代表例である。1970 年代になると、「地域文化」を称揚する時代の風潮にも影響されつつ、パリにおける地方出身者を取りあげた個別研究がいくつか公刊された。そこでは、移住者の独自性がおのずと強調され、移住者はパリでも個性を失わなかったと考えられた。1990 年代以降、現在に至るまで、選挙人名簿や徴兵文書を利用した歴史人口学的な研究が進められている。その集大成ともいえるべき、フォル/ファルシ共著『ある世代のフランス人の流動性』(2003 年)は、移住者の大半は特定の街区にかたまらず市内に散住していたこと、婚姻においても同郷者同士で結婚するのは少数派だったことなどを、実証的に明らかにしている。

このような研究と解釈の変遷を振り返ると、そこにひとつの傾向があることがわかる。すなわち、パリ全体を歴史人口学的な観点から研究する場合に、移住者の統合ないし同化の側面が強調され、個別の集団を詳細に研究する場合には、彼らの個性や独自性が強調されるのである。研究の尺度と視点の違いを考えれば、二つの理解はかならずしも矛盾するわけではない。全体的には統合されているが、独自性を維持する事例が局地的にみられるということは、ありえるからである。したがって、どのレベルで事象を捉えるのが適切なのかを、あらためて検討する必要がある。

もうひとつ、これまでの研究には不十分な点があった。それは、移住と政治との関連を積極的に取りあげてこなかったことである。人口流入と並んで 19 世紀パリを特徴づけるのが、政治変動の激しさである。幾度も暴動や革命の舞台になったことは周知の通りだが、右から左までさまざまな政治潮流が国政への進出を試みたのも、首都でのことであった。このような政治動向にパリ社会の特徴がどのように関連しているのかは、いまだ検討の余地を大きく残している。

以上の点を承けて、本研究では、第三共和政前期(1870~1914 年)を時間的枠組みに、パリにおける同郷集団が選挙にいかに関わったのかを研究したものである。

2. 研究の目的

本研究は、一義的にはフランス近代史研究の一環としてなされるものである。近代パリにおける移住者の様態や政治との関連については、上にも述べたとおり研究の余地が残されている。また、近代パリの政治史そのものが、都市規模の大きさや政治史上の重要性に比べて研究されることが少なかったことも事実である。このような研究の相対的空白を埋めることを、本研究は目指している。

敷衍して述べれば、本研究は、言語的・文化的に多様な移住者が都市社会においていかに共存しうるのか、政治にどのように関わるのかを、実証的に研究するものでもある。今日、人口移動が活発化するなかで、移住者の統合や政治参加をいかに実現するか、大都市で跋扈する排外主義的ポピュリズムにいかに対応するかが、喫緊の課題となっていることは多言を要さない。本研究は、根底においてそのような現在の問題意識を承けてもいることを付記しておきたい。

3. 研究の方法

具体的な研究においては、第三共和政前期のパリにおける市議会議員選挙および下院議員選挙を取りあげ、その選挙をめぐるさまざまな活動や場のなかで、同郷集団がいかなる存在であったのかを調査した。対象時期を第三共和政前期としたのは、1848 年の国政選挙につづいてパリ市議会選挙でも普通選挙が導入されたこと(1871 年)、言論や集会の自由化が進むこと(1880 年代前半)、同郷会の設立がさかんであったこと(世紀転換期)などがおもな理由である。

研究に際しては、特定の選挙区を選定し、それについて集中的に史料を収集・分析する方法をとった。具体的には、オーヴェルニュ出身者が多い第 11 区、ブルターニュ出身者が集住する 14 区、リムーザン出身者が根づく 5 区、である。この 3 区には最大で 12 の選挙区が存在していた。

先行研究のうち、同郷集団を取りあげたものの大半は、特定地域の出身者の研究に特化していた。このアプローチをとれば彼らの特殊性が強調されるのは不可避である。そのため、本研究では特定地域の出身者に絞るのを避けた。一方で、パリはフランスでは群を抜き、ヨーロッパでも屈指の巨大都市であるため、実証性を確保するには空間的に限定する必要があった。上記 3 区を事例にすることにしたのは、そのためである。

主たる史料はパリ警視庁文書館 BA 系列である。ここには、候補者のポスター・ビラ、選挙運動を監視する警察報告などがまとめて保管されている。これらの多くは警察の側からの史料なので、それ以外の視点を表わすものとして、区・街区レベルの新聞、同郷会の刊行物の利用を試みた。ただ、このような定期刊行物は概して保存状態が悪く、フラ

ンス国立図書館でおこなった閲覧申請の大半が謝絶されたことを記しておかねばならない。

4. 研究成果

パリの市政について、研究代表者は以前、第三共和政前期を枠組みとして詳細な研究をおこない、議員に大きく二つのタイプがみられたことを示した。一つは「地元名士型」議員で、パリで生まれ、主として商工業に携わり、地元行政などにおける活動の延長として市議会に選出された者である。もう一つは、「政治家型」の議員で、地方出身で、弁護士などの専門職に就き、市議会をステップにして国政に転出しようとする者である。このうち後者は、議会内での影響力や発言力が強く、会派の領袖である場合が多かった。

市政のこのような特徴は、移住者の集団とりわけ同郷会と関係している可能性が考えられる。すなわち、同郷会がパリの特定の街区で完結することなく、ネットワークとして機能し、パリを媒介として地方と国政をつないでいたという可能性である。実際、この時期のフランスでは、政党がまだ組織化の途上にあり、諸選挙においてはアドホックな後援会や支援団体が重要な役割をはたしていた。そのため、同郷会の役割も今日に比べてかなり大きかったと考えられる。

同郷会は、世紀転換期をひとつのピークに、パリを含めフランスの各地に、文字通り簇生した。1910年時点の一史料によれば、慈善をおこなわない協会を除いてもパリには300を超える数の同郷会があったという。同郷会のおよそ半数は県単位で組織されていた。活動としては、月ないし週に一度の定例集会、年に数度の「祭り」をおこなうほか、困難な状況にある同郷者に対して、就職斡旋、衣服や食料の支給、病気の際の看護をおこなっていた。協会の実質的な活動の中心は互助であったといつてよい。いっぽう、言語にかかわる活動は、いわゆるフランス語以外を母語とする移住者が相当数いたと考えられるにもかかわらず、目立たなかった。たしかに、エリート層や知識人を中心に結成された文芸協会は、言語や文化にかかわる活動を中心に据えていたが、移住者の大半を占める民衆層との接点は少なかった。民衆層を対象としたと思われる団体にとって、言語や習慣の差異を埋め、それを通じて移住者の受け皿となり都市社会への統合を促すという姿勢は、ほとんど見受けられなかった。このことは、世紀転換期フランスにおける同郷会の隆盛の理由や背景をどう考えるべきかについて、重要な問題を提起しているように思われる。

しかしながら、収集した史料から判断する限り、同郷会の選挙への関与は弱かったといえる。具体例にした上記3区について、パリ警視庁文書館およびフランス国立図書館にて調査をおこなったが、同郷会の活動をうかがわせる史料はごくわずかであった。定期刊

行物については上記の理由でほとんど閲覧できなかったにしても、警視庁文書館の史料群はかなり網羅的に保存されていたこと、対象とした区がパリのなかでも地方出身者の集住が相対的に顕著だった地区であることからすれば、サンプルの問題とは考えにくい。おそらく、同郷会の政治活動そのものが活発ではなかったと考えるべきであろう。

たしかに、サンプルとした3つの区に限定せずパリ全体でみれば、個別の事例は見いだせる。とくに、議員個人に関わる史料（警視庁文書館 BA/927-1310）のなかには、同郷会との関係が時としてうかがえる。たとえば、アルザス地方出身のパリ市議ロート（6区選出）とヴェラン（20区選出）は、「アルザス＝ロレーヌ総合協会」に関わり、前者は協会の会長も経験した。人民戦線期に首相を務めるカミーユ・ショータンの父エミール（3区選出）は、サヴォワ地方出身であり、「パリ・サヴォワ博愛協会」の会長を務めた。このエミール・ショータンと関係が深い市議タンテ（3区選出）は、パリ・サヴォワ博愛協会をモデルに、自身の出身県の同郷会である「オート・マルヌ博愛協会」を設立している。

同様の事例は他にも若干見いだせるが、選挙で選出された議員のなかではごく一部にすぎない。もちろん、郷里に関する活動が選挙ポスターなどに記載されないからといって、活動そのものが存在しなかったことにはならないが、その場合でも、候補者も有権者もそれらを重視していなかったか、あるいは候補者がそれらにあえて言及しなかったかである。警察の報告にも言及が少ないことを考え合わせると、同郷集団の政治的機能は小さかったとみるべきだろう。

たしかに、先行研究で取りあげられたオーヴェルニュ出身者やリムーザン出身者の事例は、同郷集団の結束や熱心な政治活動を示していた。オーヴェルニュ出身者について浩瀚な博士論文を著したレゾン＝ジュルドは、11区のオーヴェルニュ出身者について、「もし彼らが一人残らず投票すれば、選挙で多数派を獲得するであろう」と述べた1897年の警察報告を引用している。この発言が仮定法で述べられていることの意味は大きいと考えるべきである。すなわち、移住者の政治的影響力の強さは、おおむね潜在的、一時的なものにとどまったと考えるべきである。

このように、世紀転換期のパリでは同郷会は数多く存在したものの、親睦や互助が中心で、政治活動には熱心ではなかった。同郷会が地方と国政とを結ぶネットワークとして機能していたとはいいがたいのである。

以上の論は、先行研究のうち1960年代以前および1990年代以降の見解、すなわち移住者はパリに統合ないし同化されていたという見解を確認するものといえる。パリ全体を視野に収めつつ移住者と政治の関連を検討したという点では、本研究はある程度まで独自性を持ってたと考えられる。

その一方で、いくつかの疑問も残される。地方出身であってもパリ選挙区の利害を代表する存在として振る舞うということは、彼らがパリ社会に統合されていたことを示唆する。しかし、彼ら地方出身者ほど国政を目指す傾向が強かったことも事実である。なぜなのか。「上昇志向」など抽象的な意識の次元で説明するのではなく、政治社会史の地平で実証的に解明してゆく必要がある。その際、個別の事例を取りあげて詳細に研究すると、かつての同郷集団研究と同じ陥穽を繰り返すおそれがある。むしろ、パリ社会への統合のされ方、いわばパリでのあり方が、生来のパリ住民とは異なるかどうかを検討せねばならない。あるいは、意識の次元で考察するにしても、市政と国政の差異の認識など、より具体的な事象に即して研究を進める必要があるのだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

長井伸仁, 「[ラウンドテーブル報告] 18~19 世紀: 伝統都市の自治と公共秩序 リールとブリュッセルを事例に」, 『年報都市史研究』, 査読無, 20 号, 2013 年, 169-171 頁。

長井伸仁, 「都市における移住者と文化 19 世紀パリにおける地方出身者の事例」, 『史林』, 査読有, 95 巻 1 号, 2012 年, 178-208 頁。

長井伸仁, 「貧しさのなかで生きること 近代フランス都市住民の日常性と共同性」, 『歴史学研究』, 査読有, 886 号, 2011 年, 53-63 頁。

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

長井伸仁, 他著, 上智大学文学部史学科編, 『歴史家の窓辺』, 上智大学出版, 2013 年, 243-264 頁(「個人の史料からみる歴史 近代フランスの場合」を執筆)。

長井伸仁, 他著, 林田敏子・大日方純夫編, 『警察』, ミネルヴァ書房, 2012 年, 197-233 頁(「自由・国民・秩序 共和政フランスと警察」, 「科学警察の産声 アルフォンス・ベルチヨン」を執筆)。

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長井 伸仁 (NAGAI, Nobuhito)

上智大学・文学部・准教授

研究者番号: 10322190

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: